

テーヌと歴史

讃井, 鉄男

<https://doi.org/10.15017/2339110>

出版情報 : 史淵. 29, pp.31-52, 1943-09-20. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

テーヌと歴史

讚 井 鉄 男

十九世紀の佛蘭西史學を語る者は、世紀の前半に於けるティエリを代表者とする所謂「物語的史學」とギゾーを代表者とする所謂「哲學的史學」の成立と、この兩派の傾向を綜合大成した世紀中葉の所謂「綜合的史學」の興隆を説くのが常である。

史學の主要目的が (一) 傳承、文書、事實の批判 (二) 人間行爲を支配する科學的法則の發見と人間行爲の哲學の闡明 (三) 過去への生命の賦與にあるとするならば、綜合的史學を代表するルナン、テーヌ、ミシュレこそ十九世紀佛蘭西史學の代表者であると云へよう。特にルナンは批判的史家であり、テーヌは哲學的史家であり、ミシュレは創造的史家であつた。故に批判的教訓はこれをルナンに求むべく、哲學的見解の名によつて史學を科學として樹立するための顯著な試みはテーヌに見らるべく、幻想と過去の蘇生の秘密はミシュレに求められねばならない。

小論の目的は哲學的史家としてのテーヌとその史學の性格の一端を明らかにせんとするにある。

『現代佛蘭西の起源』が『英文學史』と共にテームの代表的な二大著作であることは周知の通りであるが、恐らくこの兩書ほど幾多の問題を投じ、烈しき論議の的となつた著書も亦稀であらう。

文學の歴史であると同時に人間の心の歴史でもあるもの、テームの言葉を借りるならば、「歴史の解剖學或は生理學」の敘述を目的として嚴密に決定論的な歴史哲學の書『英文學史』を發表し（一八六二年）、自己の方法を定義して有名な「人種」、「環境」、「時代」の理論を説いたその序文が多くの物議を醸し、殊にその中の「徳と惡徳は硫酸鹽と砂糖の如き生産物である」の一句によつて、テームは唯物論者の極印を押され、オルレアン①の司教デュパンルーは、その『家庭の子弟と父兄に與ふる勸告』の中で、ルナン、リットレ、と共にテームを瀆神の典型なりとしてこの新しき異端を彈劾し、翰林院も授賞を拒否したのであつた。

然るにミシュレにとつては愛の創造物でありテームにとつては猜忌と憎惡の所産であつた佛蘭西革命②に關する書『現代佛蘭西の起源』が一八七五年一度公表さるゝや、忽ち轟々たる非難を捲き起し、その第一卷は舊制度の讚美者を、次の三卷は革命主義者を、最後の二卷は帝政謳歌者を憤激させ、あらゆる政治黨派は競つてこの獲物に飛びかかり、或者はこの偶像破壊者を「革命打倒の魔劍を携へて古文書館より躍り出た考證史家のジ・ゼフ・ド・メーストル」③に擬し、或者は當然の歸結にすぎぬテームの悲觀論を

最も卑俗な原因に歸してそこに矛盾撞着を見出さんとしたのである。そして今度はテーヌは保守主義殊にカトリック的保守主義者の偶像と化し、彼こそ眞の佛蘭西革命史家であると看做さるゝに至つた。

だが、この著書が何よりも佛蘭西革命史研究家の激烈な論争の對象となつたことは、隠れなき著明な事實である。歴史家ブートミー、モノー、アルベール・ソレル等⁽⁴⁾の本書に對する同情的な評價にも拘らず、一九〇五年より同七年に亘りソルボンヌ大學に於てなされたる公開講義を纏めた一書『佛蘭西革命史家テーヌ』⁽⁷⁾によつて、オラルルが歴史家としてのテーヌの方法を完膚なきまでに糺弾して以來、本書に對する賛否の論が絶えない。⁽⁸⁾

「粗漏と不注意とより生ずる誤謬はこれを寛恕し得るも、もしもその誤謬が悪しき方法、偏頗、政治的哲學的情熱より來てゐるならば、それは歴史書からそのあらゆる權威を奪ひ去らないであらうか」と、オラルルは評し、更に語を續けて、「テーヌの書は、結局のところ、そしてその一般的結果に於て、歴史には殆ど無用であるやうに思はれる」、⁽¹⁰⁾とまで極言するに至つてゐる。

例へば現代の史家セーニョ・ボスも「曖昧且つ不完全なる指示と不正確なる援用の他は何等の参照文献をも擧げず」とて、テーヌの方法の完全なる缺除を指摘して、「テーヌは佛蘭西の歴史家中恐らく最も不正確なる者」であるとなし、又アンリ・セーの如きも、⁽¹²⁾テーヌの豫め抱懷せる政治思想殊に英國の貴族政治讚美の思想が事實に對するテーヌの解釋を、從つて現代佛蘭西の起源に關する探求の結果を誤まらしめたことを非難してゐる。

これらの主として歴史家テーヌの方法に關する批判はなるほど傾聴すべき多くのものを含んでゐるとはいへ、この歴史の一大時期の研究のためテーヌがその二十箇年の餘生を傾けて良心的にして眞摯なる探求を重ねたことも事實であり、彼の同時代には、トックヴィルを除けば、歴史家としての判断を下すためこれほど老大な文書を涉獵した者がなかつたといふことも明らかである。それ故、テーヌの大著『現代佛蘭西の起源』を繕くに當つては、著者が如何なる精神を以てこれを書いたか、この書は如何なる性格と目的とを有したかを、我々は常に忘れてはならない。

優れた敘述を含むテーヌ傳の著者ラポルド・ミラアはその著『イボリット・テーヌ、一つの知的傳記の試み』の中で、『現代佛蘭西の起源』の性質と目的及びこれに先だつテーヌの全著作との關係を誤解して誤れる批判に陥らざるやう誡め、オラルルの批判を更に批判して次のやうに言つてゐる。⁽¹⁴⁾

(一)、オラルルの論難の書は『佛蘭西革命史家テーヌ』と題してゐるが、テーヌは決して佛蘭西革命の「歴史」を書かうとしたのではない。換言すれば、この時代のあらゆる複雑さに關する明晰な論理的觀念を我々に與へんとするものではない。

彼は専ら如何なる心理的理由によつて一八〇〇年以前及び以後に於て佛蘭西がその變革を試み、彼の考へによると、失敗したかを探求せんとしたのであり、それは一つの哲學的研究であつて、テーヌはその著書を決して『現代佛蘭西の起源の歴史』とは題しなかつた。恰も英國人に關する心理學的特殊研究の書を彼自身の意志に反して『英文學史』と題した如く。(この點に關しては、夙にサント・ブーヴが

『英文學史』の題名を『文學による英國の民族と文明の歴史』と訂正したならば、テーヌ反駁者の數が減じたであらうと言つてゐるのは卓見であるが、⁽¹⁵⁾更にこれを『文學を通じて見た英國人の心理』と訂正したならば恐らく一層妥當であらう。

(二)、テーヌは彼の企圖する研究に著手するに十分の用意がなかつた、即ち彼はコンミューヌ内亂の危機(一八七一年三月)に際してその著書の構想を得、同年八月これが準備に取りかゝり、『舊制度』篇は一八七五年完成して公刊されたのであるから、その間僅か四箇年の月日が経つたにすぎないから、現代の我々の方法を以てすれば一人の人の一生涯を必要とするかも知れぬ著書を書くに用ひたテーヌの目が如何に短かゝつたか判るとオラールは評してゐるが、テーヌの如き精力家にして且つ訓練された人の四箇年は決して短かきにすぎるとは云へぬ、それで性急とか不用意とかを云々するわけにはゆかぬ。且又テーヌが彼の著述の計畫を多年抱懐してゐたといふこと、それは仔細に吟味するならば、綜合の綜合であつて、恰も多くの支流が大河に注ぐが如く、『現代佛蘭西の起源』の中にはそれ以前の思想が合流してゐることは、多くの實例によつて立證し得るところである。

(三)、テーヌの使用した史料が不正確であるやうに見えるので、オラールは粗漏と不注意より生ずる誤謬はこれを寛恕し得るも、傾向的な不正確さは「歴史書」よりそのあらゆる權威を失はしめると言つてゐるが、その前にこの書が歴史書であるといふことが言はれねばならぬ。テーヌの精神や方法や計畫より見るに、彼は自己の社會學的假説を確證するやうに見えるものを現實より「抽き出した」のである。

テーヌに於ては、「社會學者が常に歴史家に勝つてゐた」とは『歴史家及び社會學者としてのテーヌ』の著者ポール・ラコンブの言であるが、これは極めて妥當な批評である。テーヌの歴史描寫は彼の論題より後のものであり、歴史を書かんと企てた際に既に彼の頭の中には論題が完成してゐたのであつて、（これは後述の『英文學史』執筆の際のテーヌの態度にもあてはまる）彼に於ては補助者であつた力強い歴史家を彼は謂はゞ社會學者の從屬者となしてゐるのである。

想ふに、テーヌはその『現代佛蘭西の起源』執筆の際、二つの目的を懷いてゐたやうである。即ち第一に、現在の状態に近い諸々の起源に溯り、舊制度、革命、十九世紀初期と稱せらるゝ最近の時代を研究することによつて、現在を、佛蘭西の現在の組織を理解せんとし、第二には、テーヌは恐らく十分意識してはゐなかつたかもしれぬが、再度人間をその危機の一つに於て、その病理學的状态の一つに於て、人間性の根柢が荒々しい動搖によつて突然現れて白日の下に展開された時期の一つに於て研究せんとする秘かな目的を有してゐたと見ることはできぬだらうか。かくしてこの老大な著書の中には二つの見解、二つの關心が生じ、往々その一つは他の蔭に隠れ、そして又非常に異なる二つの論調が生じたのである。結局そこには歴史的著作といふ一面と哲學的著作といふ他の反面があり、この二つは相互に緊密な關係をもたないが、本書をよく理解するためには、この両面を明瞭に區別して考察せねばならぬ、とエミール・ファゲも言つてゐるが、これは極めて示唆に富む一つの見方である。一般に批評家や讀者がこの孰れかの一面のみを見てそれに拘泥する結果、全體に對して非常に異なる判斷が下され、殆ど同一の著作で

ないかの如き觀をさへ呈するに至るのである。

これを要するに、テーヌ誹謗者の誤謬は、彼が實は精神と事實とを支配する法則を過去の與へられた事實を通じて探求する心理學者、社會學者、歴史哲學者であつたのに、彼を單なる歴史家、古文書の調査者、原典の蒐集家と看做すことより生ずると云へないであらうか。

二

一八九三年テーヌの歿後間もない頃、アナトール・フランスは往時を追懷して語つてゐる。

「テーヌは決定論者であつた。……この巨匠の思想は一八七〇年の頃、熱烈な感激を、一種の宗教を、私が生命崇拜と呼ぶものを、我々に暗示した。彼が我々に與へたものは、方法と觀察であり、事實と思想であり、哲學と歴史であつた。そして彼が我々から驅逐してくれたものは、憎むべき御用的唯心論であつた。」⁽¹⁹⁾

これは嘗て論難の書『十九世紀佛蘭西の古典的哲學者』によつてヴィクトル・クーザン流の折衷主義を烈しく攻撃したテーヌを追想して言つたものであるが、この言葉は何よりも先づ哲學者であり、なほ又評論家でもあり歴史家でもあつたこの佛蘭西の優れた思想家の業績と思想とを極めてよく要約してゐる。

前世紀の思想史上、テーヌは空虚なる偶像の破壊者、空想の彈劾者であると同時に大膽なる先驅者で

あり、手堅い素材を用ひて鞏固な基礎の上に基きあげる強靱なる建設者であつて、眞理に熱中し而も普遍的形而上的見解に到達するに先だち「事實」の教訓に就き觀察と分析の規則に従ふに足る十分の謙讓さを有した實證的精神の持主であつた。

「文明、國民、世紀は展開する定義である。人間とは歩行する定理である」、とはテームの有名な言葉である。この定義を發見し、この定理を證明することが必要である。テームにとつては、歴史は結局心理學の問題、「心理學的メカニクの問題」⁽²⁰⁾であつて、そこに「人種」、「環境」、「時代」の三要素が作用し、「卓越能力」が働く。歴史家は實驗であり、劇作家と同様に「應用心理學」⁽²¹⁾を實施するのである。

テームが歴史を説明する場合に用ひた有名な「人種」、「環境」、「時代」の三法則と「卓越能力」の説をこゝに詳説する追はないが、こゝではたゞ哲學的史家テームの方法の一端を瞥見するにとどめよう。

テームを論ずる者は彼の有名な三法則と「卓越能力」の説をテーム自身に適用して説くのが常である。テームと同様に精神史の領域に自然科学的方法を應用した同時代の評論家サント・ブーヴのテーム論(『月曜談叢』第三卷、及び『新月曜談叢』第八卷)⁽²²⁾は有名であるが、彼の所論にはこの評論家でもあり歴史家でもあつたこの兩巨匠の方法の顯著な對立が窺はれて面白い。先づサント・ブーヴはテームの處女作『ラフォンテームの寓話』に於けるテームの方法があまりに論理的推理的に過ぎ充分に自然科学的歸納的でないことに關してテームの注意を促し、次いでその『英文學史』を論じ、テームの環境説をテームに適用して彼の性格をアルデンヌ地方人の性格と對比し、又師範學校時代の極端な主知主義を指摘

した後、テースが結局普遍的なものを重んじて個性的なものを閉却した點に彼の方法の限界があるとなし、テースの使用する網が如何に精巧に編まれてゐても、その編目からは彼の批評せんとする「作家の、天才の個性」が洩れてをり、テースの「攻略し得ぬ最後の城塞」が残されてゐるとなして、テースの個性的なるものゝ取扱ひ方の缺陷を指摘してゐる。⁽²³⁾

それは兎に角として、テースの性格を評して或者は「現實主義者の論理家」と呼び（モノー）⁽²⁴⁾、或者は「論理家的詩人」と稱し（デロー）⁽²⁵⁾、或者は「哲學的想像力」とも呼ぶが（バレス）、テースの深き影響を受けてゐる傳統主義者ポール・ブルヂェが「テースの卓越能力は哲學的精神であり、それは事物を普遍的思想によつて理解せんとする熱情的な趣味と、雜然たる事實を一の體系に集める能力といふ二つの特徴をもつ」と言つてゐるのは蓋し適評である。⁽²⁶⁾

實際テースは言葉の嚴密なる意味に於て評論家でもなければ歴史家でもなかつた。彼は自己の學問の原理を評論と歴史とに適用して「哲學者的評論家」或は「歴史家的哲學者」となつた心理學者である。⁽²⁷⁾それ故、評論や歴史は、彼にとつては、結局自己の哲學的理論を人間と社會とに關して展開するための一つの好都合な手段にすぎなかつた。

次に私はテースの英國研究の態度を通じて彼の方法の一つの典型的な實例を示したい。

コンミュージア亂の最中一八七一年五月テースはオックスフォード大學の招聘を受け佛蘭西古典文學を講ずるため英國に渡つた。これは一八六〇年、一八六二年の二回の渡英に次いで第三回目の英國旅行であ

るが、テームはこの機會を利用して前回の觀察を補ひ、これは後に『英國に關する覺書』として公刊された。この旅行中敗戦と内亂の禍中にある祖國の悲惨な状態に比べて鞏固にして且つ傳統的な英國社會の安定性よりテームは讚美と羨望との深い印象を受け、このヴィクトリア王朝期英國に關して得た思想が彼の精神に一つの理想を與へ、英國の貴族主義、傳統尊重、國家主義と中央集權に對する嫌惡等のテームの政治思想が作りあげられ、それが意識的にも無意識的にも後の『現代佛蘭西の起源』の中に現れてゐることは人々の指摘してゐる通りである。⁽²⁸⁾

比較文學的な立場から極めて實證的にテームに及ぼした英國の影響を詳述してゐる好著『テームと英國』の著者ロウが言つてゐる如く、⁽²⁹⁾テームは外國に、獨逸や伊太利や英國に旅行する際は必ず豫め多くの讀書によつてその準備をするのが常であり、彼の『英文學史』は英國へ調査旅行に赴く前に既に殆ど完成してゐて、英國民に關する彼の一般的思想がそこに述べられてをり、この純然たる抽象的知識的な性格がテームの特徴である。

訪問すべき國に關する思想を注意深く行李の中に詰めて旅に出るこの旅行の仕方に關しては、次の挿話は頗る興味がある。ガブリエル・モノーが一八六六年初めて伊太利に旅行しようとしてテームに會つた時、テームはモノーにかう訊ねた、「君が伊太利に行つて證明しようとする思想は何であるか」と。⁽³⁰⁾テームは常に充分の準備をした後旅行をしたので、伊太利や獨逸と同じく英國を僅かに三箇月足らずで「採集」することができたからである。前述の如くテームは一八六〇年、一八六二年、一八七一年と渡英してゐ

るが、英國に關するテーヌの思想は謂はゞ書物を通じて、多年英國の文學や歴史に親んだ結果得られたもので、英國旅行の目的は英國人の精神に關して既に彼がもつてゐた思想と實際に臨んでなされた彼自身の觀察の結果とを比較するにあり、一八六〇年初めて英國に渡り僅々三週間の短い滞在の中に、彼は豫て自分が英國に關して懐いてゐた考への誤りでなかつたことを悟つた、とはテーヌ自身の告白するところである。⁽³¹⁾

テーヌは當時の書翰の中に「私の主要な考へはかうである、先づ總論を書き、次いでこれを偉人によつて特殊化し、つまらぬものは捨てること。英國人の精神の定義に到達するのが目的である」と記してゐる。これは『英文學史』執筆の目的ばかりでなくその方法を示す言葉であり、一般にテーヌの方法の性格をよく示してゐる。従つて名著『英文學史』や『英國に關する覺書』が、多くの鋭い洞察を含んでゐるにも拘らず、不完全たるを免れず多くの誤謬を含んでゐるのは當然である。

「歴史に於ては、他のすべての科學に於けると同様、先づ活動的な恒常的な力を出来る限り取り出し定義し測定し、次に多少とも偶然的な妨害的な所與の事實を附加せねばならぬやうに思はれる」⁽³²⁾とテーヌは言つてゐるが、これは先づ大きな科學的構成、法則を立て、次に經驗によつてこれを訂正するといふ考へを彼が持つてゐたことを示す。

これはなるほど確かに假説の裡に眞理探求の貴重な方法を見出す思想に類した豊かな思想ではあるが、——こゝで我々は「テーヌは歴史家であるよりも寧ろ社會學者であつた」といふラコンブの言葉を想起

すべきである——然し假説は科學的批判の最も正確な方法によつて決定された事實に基礎を置くべきであり、過去及び現在の英國の生活に關する不正確で皮相な觀察の上にその確信を打立てたテースの場合はさうではなかつた。従つて現代佛蘭西の起源を研究し始めた時既にテースの政治思想は出來上つてゐるので、彼の學問的誠實さ、多年の史料研究に努力した賞讃すべき良心にも拘らず、事實の解釋を少からず誤まらしめたと云はれる所以である。⁽³⁴⁾

以上に於て哲學的史家としてのテースの特徴の一端を述べたが、次に『現代佛蘭西の起源』成立の事情とその特質を明らかにせねばならない。

一八三〇年の七月革命や一八四八年の二月革命と同じく、一八七〇年の事變は歴史學と歴史家の生活や著作に深刻な影響を及ぼした。最も冷靜な歴史家と稱せられるフュステル・ド・クランジュでさへ、この事變の影響の下に現代の政治の諸問題に注意を向け、その著『古代佛蘭西政治制度史』執筆の動機は、再生せる佛蘭西に適合する諸制度を明確に指摘するために佛蘭西古代の諸制度の性質や變動を探索するにあつたと云はれてゐる。⁽³⁵⁾ テースの『現代佛蘭西の起源』も一八七〇年乃至七一年の諸事件の結果彼の心中に生じた愛國的な憂慮と驚愕より生れたものである。

獨逸はテースにとつてもルナンにとつても偉大なる知的教育者、第二の祖國の如きものであつた。テースはその抽象的な思索を傾けた『知識論』を一八七〇年完成するや、プロシヤの興隆による最近の變化が研究に値すると思はれた獨逸を直接に認識し、嘗て英文學に關してなしたと類似の一書を公にする目

的を以て一八七〇年六月二十八日佛蘭西を出發しフランクフルト、ワイマール、ライプテヒを経てドレ
ーデンを訪れつゝあつた時、⁽³⁵⁾——それは何たる皮肉な奇縁であつたことか——突然彼の旅行は獨佛開戦
によつて中斷されたのである。

敗戦に次ぐ敗戦、屈辱と悲慘を伴つた敵軍の侵略が一八一五年以來絶えて久しく佛蘭西人の經驗しな
かつた苦惱を以てすべての佛蘭西人の心を満した時、テューヌの心中にも傷ましき深刻なる懊惱が生じた。
自負心に満ちた無關心な青年時代にテューヌが考へた如く學問が萬人の所有であるといふことは眞實では
嘗てなかつた。祖國が目前に苦しんでゐる時、藝術は慰安とはならぬ。抽象と書籍の人、永遠の「冥想法」
テューヌは行動の人として立ち上つた。次いで恐るべき年、コンムーヌ内亂の恐怖、その不吉な想出でが
永く佛蘭西の意識から消え去らなかつた傷ましいドラマのあらゆる轉變が生じた。彼は恐愕し、絶望し、
„J'ai le coeur mort dans la poitrine,“と當時の書翰に記してゐる。⁽³⁷⁾彼の感受性は憤激し根柢から揺り動か
され、恰も堰堤を切つた奔流の如く溢れ擴がり、突然の驚愕と測り知れぬ豫想に激怒した。一八四八年
の革命の騒亂の日に見て束の間に消え失せた人間の幻影が再び彼の記憶に蘇り、平和で小心な思想家の
彼の魂を執拗に威壓した。「癡猛且つ卑猥なゴリラ」が醜惡極まる姿で現れ、その却掠を阻むためには、
如何に多くの鐵鎖を、如何に頑丈な鐵首枷をつけてもなほ足りないやうに思はれた。⁽³⁸⁾

敗戦と内亂に直面してテューヌの眼は先づ獨逸に對して次には佛蘭西人殊に巴里人に對して開けた。三
月十八日の暴動は祖國と同時に文明に對する罪惡であるやうに彼には思はれた。「凡そ公正なる社會を建

設するためには幾世紀にも亘る努力と犠牲が必要であることを、彼は自己の歴史的教養によつて知つてゐた。「五十世代の勤勉で忠實な労働者の作品、祖先から受け継ぎこれを我々が殖して後代に傳へねばならぬ貴重な寄託物が小數の個人の野心や亂行によつてこのやうに廢止されるのを彼は默視する」⁽³⁹⁾に忍びなかつた。

最後に、そして初めて、テューヌは人間性を、狂奔する情熱をもつた人間を眼のあたり見たのである。それまで彼は人間を直接見たことはなかつた。『知識論』執筆のための最も抽象的な思索の三箇年の後、彼は突然最も劇的な現實の啓示に接して、「これほど祖國を愛してゐるとは思はなかつた」との意識を得たのである。

革命の危機と一般的混亂のさなかに、政府機關の諸々の缺陷と公共的精神の缺除を眼のあたり見たテューヌはコンミューヌ亂中招かれて英國に渡り、故國の悲惨に比し強靱な歴史的傳統を有するこの國の力強さに心を打たれた。敗戦と苛酷な平和條約、コンミューヌ内亂の殘忍さに驚愕した彼は祖國佛蘭西救済のため働かねばならぬ必要を感じ、一八七〇年十月九日『獨逸に於ける輿論と平和條約』『普通選舉と投票の方法』を起草し、又社會的更生の強力な機關としてブートミーの創立せる「政治科學學校」の創設に参加して盡力するところがあつた。

嘗て彼が多少とも漠然と計畫した革命、歴史の法則、佛蘭西に於ける社會と宗教に關する著述の考へは、⁽⁴¹⁾今や新しい形で彼に提示された。即ち一七八九年より一八〇四年の間に勃發せる革命の研究によつ

て現に佛蘭西を苦しめてをり佛蘭西を次第に弱めた政治的不安定と社會的困難を説明せんとしたのである。

「佛蘭西の多くの禍根は現代社會と民族の傳統との絶縁より生ずる。新しく建設するに先だち、我々がその上に立つ地盤を探り、我々の祖國との絶縁の原因を認識し、そのためには過去と現在との決定的な分離の生じた時代即ち佛蘭西革命まで溯らねばならぬ。」⁽⁴²⁾と彼は考へた。

彼は二十年の餘生を必要とする程の仕事に著手するとは思はず、初めは一般的思想を敘述する一巻の書を書かんと考へたが、新しい事實の集積と、自己の思想を一層明確にする必要から舊制度、革命、新制度の三部に分つこととし、親しく未刊既刊の多數の史料の讀破と吟味に没頭し、資料に役立つ無数のノートを取り、且又行政立法財政の方面に於ける専門的知識を得る必要を感じ、専心この仕事に没頭し、遂にその完成を見ずして一八九二年病に仆れ、一八九三年三月三日歿した。

「一國民が入り且つとまることの出来る社會的政治的形式はその國民の勝手氣儘に委せられるのではなく、その國民の性格と過去によつて決定される。……それ故もしも我國の形式を我々が見出すことができるとしたら、それは我々自身を研究して後のことであらう。」⁽⁴³⁾

「現代の佛蘭西とはいかなるものか。この質問に答へるためには、この佛蘭西がいかにして形成されたかを知らねばならぬ。……前世紀の末に恰も脱皮する昆蟲の如く、佛蘭西は激變した。その舊き組織は崩壊し、自分自身の最も貴重な組織をさへ寸斷し、死に瀕した如き痙攣に陥つた。次いで度々の痙攣

と苦しい昏睡の後、再び立ち上つたが、その組織はもはや同じではない。⁽⁴⁴⁾

「世紀の初に佛蘭西が作つた組織の中に、佛蘭西の現代史のすべての輪廓は描かれてゐる。……それ

故我々が我國の現状を理解せんと欲する時、我々の眼は常にそれによつて舊制度が革命を、革命が新制度を生んだ恐るべき危機に向けられる。⁽⁴⁵⁾」

「舊制度、革命、新制度、この三つの状態を正確に私は敘述しようと思ふ。その他には何の目的もないといふことを、私は茲に敢て明言したい。歴史家が博物學者として行動することは許されるだらう。

私は恰も昆蟲の變態に對するが如く、私の題目に向つた。……虚心坦懷であれば、好奇心は科學的となり、驚くべき作用を導く内面的な種々の力に没頭することができる。これらの力とは各集團の状態、情熱、思想、意志であり、我々はこれを識別し殆ど測定することさへできる。これらの力は我々の眼前にあり、我々は臆測、疑はしき推測、漠然たる指示を強いられることはない。⁽⁴⁶⁾」

『現代佛蘭西の起源』の序文中の右の如き言葉はこの著者の意圖と方法を極めてよく説明してゐる。

テーヌは嘗て文學や藝術に適用した原理や方法をこの歴史の一大時期にも適用するであらうが、この新しき企圖に適用される彼の精神は全く同じ精神であるとは云へないだらう。なるほど彼は依然として哲學者として科學者として振舞ふであらうが、それはもはや絶對に不偏不黨な學問ではないだらう。モノが巧みに形容してゐる如く、⁽⁴⁷⁾テーヌは恰も患者の病床の傍にあつて病氣の徴候を窺ひ、その病の性質を診斷し、治癒を望む醫者の如きものであらう。

テーヌの以前の著作『英文學史』『十九世紀佛蘭西の哲學者』『知識論』と最後の著作『現代佛蘭西の起源』は一見著しい對照をなすやうに見えるので、所謂「二つのテーヌ」(ポール・ブールヂュの言葉)を區別し、歴史家テーヌを中傷せんとする人々もあるが、敗戦と内亂の影響を過大視して一八七〇年以前のテーヌと以後のテーヌを割然と分つのは不當であり、彼が二十箇年の餘生を傾けんとする新しい大きな著述は過去二十二箇年を捧げた著作の繼續である。

こゝでは彼は書き且つ分析するのみに満足せず、批判を下し、憤慨する。舊制度の没落、革命の猛威、帝政の榮光と専制に於て必然的な不可避の事實の繼起を單に提示せずして、缺陷を、誤謬を、罪惡を語り、恐怖政治に對しては、伊太利や英國の革命に對すると同じ尺度を以て測らうとせず、又十五世紀十六世紀の暴君や傭兵隊長に對して極めて寛容であつたのに、十九世紀の傭兵隊長、史上に於ける最も偉大な人間ナポレオンについては嫌惡の情を以て語る。

前述の如く第一卷は舊制度の讚美者を、次の三卷は革命主義者を、最後の二卷は帝政の讚美者を憤慨させた。

テーヌのこの首尾一貫せざることを人々は烈しく非難し、革命家に對する彼の峻嚴なる態度を政治的情熱や、保守主義者に對する阿諛や、或は民主的制度の危険や責任に對する恐怖に歸せんとさへするに至つた。

なるほどこの最後の著作に於ては彼の論調と或程度彼の見解は變つて來てゐる。戦争とコミュニヌの

興奮がテームの精神に影響を及ぼしたことは否定し難い。然しそれは一般に想像せらるゝ如く安價にして幼稚な影響を與へたのではない。彼はそこに佛蘭西の凋落の徴候と一世紀前に突發した政治的動亂の説明と結果を見るやうに思つたのである。彼がそこで感じた興奮は非難せらるべきではない。寧ろこれ程感激して、佛蘭西が崩壞の淵に望んでゐるのを見て、祖國を苦しめる病害の悲劇的な描寫によつてそれを阻止し得ると信じたのである。彼は黨派の圏外に超然として、佛蘭西と學問のみを念頭に置いた。

モノも言ふ如く、⁽⁴⁸⁾テームはその方法と理論を棄てたのではなく、むしろそれらを一層強調したのである。一つの普遍的思想を確立するため、今迄にこれ程絶えず小事實集積の方法を使用したことはない。常に同じ方向に働く極めて單純な二三の原因の作用によつて一聯の歴史事實がこれ程嚴密に決定せられてゐる有様を描いたことは今までない。彼に非難さるべきは、問題をあまりに單純化し、その或要素を閉却し、集められた豊富な事實にも拘らず、その矯正物として役立つ他の事實を無視し、これを要するに、現實に於て既に陰氣な光景を一層暗黒にした點である。テームの著作に於て誇張されてゐることは、佛蘭西に對する彼の愛國の情と同時に彼が佛蘭西の性格と制度に對して有した自然的同情の缺除に基づく。こゝに英國の政治が彼に及ぼした影響が見られねばならぬ。

最後に我々は次の様な疑問を提出したい。テームは政治史社會史を彼の嚴密な科學的哲學的原理に従はせて十分成功したのであらうか。⁽⁴⁹⁾彼は現代の佛蘭西に關して「科學的な意見」を得んと欲した。現在に満足せず、未來に不安を懷いた彼は佛蘭西を苦しめる害惡に對する救濟手段を求めんと

した。そのため、そして彼の原理に従つて、彼は原因を分析する義務を感じた。そしてこれらの原因は「それによつて舊制度が革命を、革命が新制度を生んだ恐るべき危機」の裡にのみ求められるので、「恰も昆蟲の變態に對するが如く」自己の題目に「博物學者」として對し、勇敢に仕事に著手し、「興味ある」現象の觀察に「不偏不黨の好奇心」（と少くとも彼は信じた）を適用した。その企圖たるや正しく超人的であつた。「私は恰もフロレンスやアテネの革命を題目とするかの如く書いた」と彼は言つてゐるが、グロートやモムゼンが希臘や羅馬の歴史を書いた時と同じく、テーヌは虚心坦懐ではあり得なかつた。グロートやモムゼンと同じく彼が偉大な歴史家であるのは寧ろその故である。公平無私たらんとする彼の眞摯な熱心な希望と彼の科學的顧慮が無益であつたとは云へない。その様な希望と顧慮こそ彼をして「現代佛蘭西の起源」に關して今までになされたうちで最も廣範圍の最も詳細な研究をなさしめたのであり、多くの新しい未知の事實を明らかにし、不完全であり且つ先入見によつて研究された史料に基いてではあるが、多くの正しく新しく深味ある思想を提出し、それを力強く表現したのである。

然しながら、あの様に烈しい憤激の語調で革命の日の過激行爲を貶し、ジャコバン黨やロベスピエールやナポレオンに對してあの様に非難攻撃し、佛蘭西人の祖先の政治的社會的業績をあの様に峻厳に「批判」した人は純粹なる「學者」、眞の「決定論者」、「單純なる精神的動物學の愛好者」であらうか。

結論はかうである。スピノーザ及びヘーゲルの極めて忠實な弟子であるテーヌは「精神諸科學と自然科

學とを熔接」せんと試みた。だが、新しい研究題目に自己の嚴正な決定論を、極端な演繹の嚴密な方法を適用するにつれて、益々彼の體系も亦現實から新なる拒否を受け、彼の對象物は執拗に彼の把握の手を逃れんとするかに見えた。一般評論、美學、歴史等、科學のため獲得せんと欲したすべての領域に於て、テームは著しい敗北と陰險な反抗に遭遇した。而も彼自身それに協力した。即ち實際に於て彼は自己の理論的頑固さを緩和することを知つてゐたのである。哲學者の奥に人間が現れるのが見えた。

そここそ、哲學者テームの悲劇と人間テームの面目が窺はれないであらうか。嘗ての徹底した實證主義者が晩年次第に實證主義を離れて行き、老大な社會保守の書を執筆し、後年の佛蘭西の傳統主義者國民主義者に深甚な影響を及ぼしたことは、洵に興味深い事實である。

註

- (1) Histoire de la littérature anglaise. Préface XV.
- (2) Camille Jullian, Extraits des historiens français du XIX^e siècle, p. CXV.
- (3) Paul Bourget, Essais de psychologie contemporaine p. 202.
- (4) E. Boutmy, Taine, Schérer, Laboulaye. p. 38.
- (5) G. Monod, Renan, Taine, Michelet p. 171.
- (6) A. Sorel, Discours de réception à l'Académie française.
- (7) A. Aulard, Taine, historien de la Révolution française.
- (8) A. Cochin, A. Matiez, P. Lasserre etc.
- (9) A. Aulard, op. cit p. 324.
- (10) A. Aulard, op. cit p. 330.

- (11) Seignobos, dans l'histoire de la littérature française de Petit de Julleville VIII. P.273.
- (12) H. Sée, Taine et l'aristocratie (Science et philosophie de l'histoire p.397.)
- (13) H. Taine, Sa Vie et sa correspondance III. p. 162.
- (14) Laborde-Milla, H. Taine Essais d'une biographie intellectuelle pp. 145-150.
- (15) Sainte-Beuve, Nouveau Lundi VIII. p. 67.
- (16) Paul Lacombe, Taine, historien et sociologue Préface p. 1.
- (17) E. Faguet, Politiques et moralistes du XIX^e siècle pp. 279-280.
- (18) René Gibaudin Les idées sociales de Taine p. 129.
- (19) Victor Giraud, Essais sur Taine p. 187.
- (20) Taine, Litt. Angl. I. p. XXXII.
- (21) Taine, Correspondance IV. p. 57.
- (22) Sainte-Beuve, Causerie du Lundi III. pp. 249-284, Nouveau Lundi VIII. pp. 66-137.
- (23) Herman Gmelin, Französische Geistesform in Sainte-Beuve, Renan und Taine pp. 25-27.
- (24) G. Monod, op. cit p. 155.
- (25) V. Giraud, op. cit p. 104.
- (26) Paul Bourget, Réflexions de l'art de l'histoire (Etudes et Portraits p. 295.)
- (27) R. Gibaudin, op. cit p. 52.
- (28) F. C. Roe, Taine et l'Angleterre. (Bibl. de la litt. comparée). H. Sée op. cit.
- (29) F. C. Roe, op. cit. Préface pp. VII-VIII.
- (30) Roe, op. cit. p. VIII. Aulard, op. cit. p. 11.
- (31) Roe, op. cit. p. 32.
- (32) Taine, Correspondance II. p. 156.
- (33) Taine, Correspondance IV. p. 129.

- (34) H. Séé, op. cit. p. 420.
- (35) C. Jullian, op. cit p. CXXIV.
- (36) Taine, Correspondance II. p. 354.
- (37) Taine, Correspondance III. p. 67.
- (38) V. Giraud, op. cit. pp. 88-89.
- (39) Taine, Correspondance III. p. 59.
- (40) Taine, Correspondance III. p. 60.
- (41) Taine, Correspondance II. p. 384-385.
- (42) Taine, Correspondance III. p. 156.
- (43) Taine, Les origines de la France contemporaine I. Préface p. IV.
- (44) op. cit. pp. V-VI.
- (45) op. cit. pp. VII-VIII.
- (46) op. cit. p. VIII.
- (47) G. Monod, op. cit. p. 123.
- (48) G. Monod, op. cit. pp. 168-169.
- (49) V. Giraud, op. cit p. 130.